

<大会校・課題研究委員会合同企画シンポジウム「初年次を超える初年次教育：キャリア形成支援の視点から」>

趣旨説明

関田一彦
創価大学

今回の課題研究シンポジウムは大会校との合同企画として実施しました。課題研究委員会では、初年次教育学会のこれからの展開を考え、初年次教育にとって重要な周辺領域との連携可能性を検討し、大学教育の課題を提起していくことを当面の課題研究と考えています。ただ、今年は役員選挙の年回りとなり、課題研究委員の入れ替えが行われました。その関係で、課題研究委員会独自の企画立案に十分な時間が取れませんでした。

一方、大会校としては3ポリシー作成ガイドに明記されたように、学士課程の入り口を担う初年次教育と出口を担うキャリア教育、その両方をカリキュラムの中にどのように組み込み、その成果をどのように点検するかという課題について、会員間でアイデアを共有し、理解を深める機会を設けたいと考えていました。そこで、今回は初年次教育の周辺領域の一つとしてキャリア教育を捉え、シンポジウムの合同開催となった次第です。

高大接続システム改革が進展し、入学者受入れ方針(アドミッションポリシー)の明示が求められ、受け入れた新生をどのように育て社会に送り出すか、学士課程教育の起点である初年次教育の重要性が改めて強調されています。教育課程編成方針(カリキュラムポリシー)策定においても、学部専門教育と初年次教育の連携・融合が求められています。学位授与方針(ディプロマポリシー)に謳う学修成果を確かにするための学士課程プログラムを描く上で、初年次から最終年次へと続くシームレスなカリキュラム編成は不可欠です。初年次教育を共通教育の一部に限定して、専門教育と分けて扱う大学はさすがに少ないでしょうが、どのように連携・融合するか模索中の大学は多いと思われます。

なかでも、初等・中等教育における学習指導要領改訂にともない、大学においてもキャリア形成支援を念頭に置いた学習指導の必要性が増しています。大学ではアクティブ・ラーニングの導入が進んでいますが、初等・中等教育ではアクティブ・ラーニングを通じた「主体的・対話的で深い学び」の具現化が求められています。そして、この主体的な学びについて文科省は「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び」と説明しています。高大接続の流れでいえば、大学の授業にも同様の主体的な学びが期待されていると考えてよいでしょう。

一方、新卒一斉採用の枠組みが崩れ、企業インターンシップの低学年化も進み始めました。初年次教育の一環として配された科目でも、キャリア形成と関連付けることで学生の学習意欲向上を図る実践は多いでしょう。そこで合同シンポジウムでは、社会との接続を意識した初年次教育について立教大学の中原淳先生に、高校までのキャリア教育と初年次教育との繋がりについて日本大学の望月由起先生にご講演いただきました。また、このような課題意識に立ち、大会のテーマも「初年次を超える初年次教育：キャリア形成支援の視点から」としました。